

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の理念とグループホームの理念に沿ったケアをするように心掛けている。職場会開催時全員で唱和するようにしている。	法人理念の下、個人を大切にし安心でその人らしい生活が送れるようにとホーム独自の6つの基本理念が作られている。事務所内に理念を掲示し職場会で唱和し、内容を共有している。理念にそぐわない言動等が職員に見られた時には管理者が個別に面談し注意を促している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナのため交流等はご遠慮させて頂いています。	法人として区費を納め、毎月複合施設周辺の清掃活動も行っている。現在は新型コロナ禍で中止となっているが例年であればボランティアによる傾聴、歌、フラダンス、踊り、腹話術等が複合施設の多目的ホールで行われ、利用者も楽しんでいる。同じく例年であれば、中・高校生の職場体験や福祉大学の実習生の受け入れを行い、その縁で法人への就職にも繋がっているという。そうした中、小学生が花を育て鉢植えを届けてくれ、利用者はお礼に手紙を書き写真を添えて送りコロナ収束後の交流を楽しみにしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	人材育成の貢献として、実習生、学生の職場体験の受け入れを行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進委員の地域の方々々に活動報告書を送り、率直な意見等を頂き業務に活かしている。	3ヶ月に1回、併設する小規模多機能居宅介護支援事業所や地域密着型特養と合同で開催している。例年であれば、家族代表、区長、消防分団長、民生委員、老人クラブ会長、広域連合職員、市高齢者福祉課職員、施設関係者などが出席し行われているが、現在書面開催となっており、資料を送り質問、意見、要望を聞き入れ次回の資料で回答するようにしている。コロナ禍でもレクリエーションへの意見を頂き、サービス向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	諏訪広域主催の連絡会に参加し意見等を頂いている。	市高齢者福祉課担当者とは密に連絡をとり、介護認定更新時には市担当者に利用者の状況を伝え連携をとっている。研修や講演はオンライン研修となっており、2ヶ月に1回のケアマネジャー連絡会はウェブ開催で情報や意見を交換し、業務に活かしている。例年であれば市介護相談員の来訪が2ヶ月に1回あり、その結果や利用者の様子を理事長に直に伝えていただきケアに反映しているが、現在は休止としている。	

こころのひろばグループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	利用者の行動を制することなく見守り、寄り添うケアに取り組んでいる。	ホームは2階にあり、出入り口のエレベーターや階段のドアは安全確保のため職員により管理されている。外出傾向のある方は職員と一緒にエレベーターで下に降りたり別のフロアに行くなど、寄り添い話を聴き気分転換を図っている。転倒予防のため夜間数名の方が家族了解の下センサーマットを使用しているが職場会で話し合い解除に向けて検討を重ねている。3ヶ月に1回身体拘束適正委員会を開き職員の意識を高め、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人研修を年2回行っている。他事業所の職員と意見交換を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人の研修に参加し制度の理解を多くの職員が出来る様にしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	時間をかけてゆっくり説明し、不明な点はないか、その都度確認しながら契約をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族には毎月の手紙や来訪時に様子などをお伝えしている。	利用者の半数が要望を伝えることができる。その他の方については表情や態度から受け止めケアに繋がっている。家族の来訪は週2回から月1回で、また、受診付き添いで来られた時に意見や要望を伺うようにしている。家族会も年2回行っていたが、コロナ禍でオンライン面会も行ったがうまくいかなかったという。毎月のホーム便りで利用者一人ひとりの写真と担当者手書きのメッセージ・近況を伝え、法人の「こころ」便りと共に家族に送付している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	運営については、経営コンサルティング会社が助言、相談にのってくれている。モニタリング会議にて1か月の振り返り問題点を上げて次に繋げていっている。職場会、送りノートに記入し、職員に周知している。	職員は両ユニットをシフト制で勤務し、月1回の職場会はシフトに合わせて開催している。利用者一人ひとりのカンファレンスや話し合い等で、活発に意見が出され、検討された改善点をケアに繋げている。月1回の職責会議の内容は管理者が口頭か送りノートで報告している。法人として目標管理制度も導入しており法人役員の面接もある。また、法人として経営コンサルティング会社の支援も受けており、その会社による面談も行い、職員の意向を運営に反映している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、小まめに利用者や職員に声を掛けたり、職員の業務を把握している。相談事も聞いてくれる。職場会にも参加して意見等聞いてくれ指導を受けている。		

こころのひろばグループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人研修を毎月行っている。勤務を調整をしながら参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナの為交流の機会がなく取り組めていない。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面接の際にご本人の生活歴や趣味などを話して頂き傾聴している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の苦労、ご本人の今までの様子をゆっくり聴き理解するようにしている。ご家族の想いを大切にしようと心掛けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	他のサービスも考えながらご家族に説明している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	お互いが和やかな生活を送れるように雰囲気作り声掛けを行っている。ADLの低下をさせないために出来ることはやって頂くように自立支援のお手伝いを行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	御本人の気持ちを代弁しながら、ご家族様に日常生活のなかで、変化があった時は、詳しく様子を伝えご家族と相談している。ご家族様には受診時のお願いをし関わりを持ってもらっている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	今は、コロナのため制限があるため出来ない。	新型コロナウイルスの感染拡大前は友人・知人の来訪があり、散歩の時、近所の方との挨拶や会話もできていた。馴染みの美容室に行っていた方は訪問美容になり新型コロナウイルス感染症により来訪・外出ともできない状況にあるが、昨年秋には予約制で10分間の面会を行うことができたという。電話は事務所からかけることができ、利用している方もいる。	

こころのひろばグループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず に利用者同士が関わり合い、支え合えるような 支援に努めている	個別に話を聞いたり、利用者同士の関係が 上手くいくように職員が間に入り調整役 になっている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関 係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族 の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者様の退去後、ご家族から相談があれ ばいつでも相談に乗れるように努めている が、特に相談事はない。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握 に努めている。困難な場合は、本人本位に検討し ている	日々の関わりの中で言葉や表情などをしっ かりと観察し、職場会でアセスメントを行い 把握に努めている。	半数の利用者が思いを伝えることができ、その他の方 については表情や態度、また、日頃職員が接する中 で得た一人ひとりの情報を基に思いを受け止めてい る。拒否の言葉は全員伝えることができ、その都度、 推測し判断している。入浴時、また、居室で話を聴くこ とも多く、気づいたことは「気づきノート」に記入し職員 間で共有し、アセスメントシートにも追記して職場会で 話し合っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環 境、これまでのサービス利用の経過等の把握に 努めている	これまでの生活歴を把握し、そのの方に 合った対応をするようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する 力等の現状の把握に努めている	一人一人の生活パターンを理解し行動など を把握し不安なく過ごせるように努めてい る。心身状態にも注意し体調の変化を観 察、バイタル測定を行い申し送りをしっかり している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方 について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、 それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即 した介護計画を作成している	職場会時、利用者様の困っていること、ADL の低下について話し合い検討している。ご 家族様にもお話させてもらい、ご家族様の 意見を大切しケアプランに反映するようにし ている。	職員は1~2名の利用者を担当し、身の回りの物品補 充、毎月のお便りの作成、ケアプラン作成に関わって いる。利用者のケアプランについては職場会で検討し モニタリングを行い、家族の意向を大切に介護計画を 作成し、半年に1回見直しをしている。利用者に変化 が見られた時には随時見直しをしている。家族の意向 はホーム来訪時や受診付き添い時にケアマネー ジャーからお聞きしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を 個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら 実践や介護計画の見直しに活かしている	気づきノートを作り、いつもと違う様子や話し た内容などを記載し、職員全員が情報の共 有が出来るようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズ に対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟 な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご家族が定期受診に同行出来ない時や、 急変時の受診の同行はしている。コロナの ため制限があり、インホームサービスが 利用出来なくなっている。		

こころのひろばグループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナのため地域との関わりがありません。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者様の体調の変化がある時は、速やかに主治医に連絡を取り指示を頂いている。相談事にも対応してくれる。	利用前のかかりつけ医を継続している方は四分の一弱ほどおり、あとの利用者は複合施設敷地内にある協力医に変更している。どちらも月1回の定期受診には家族が同行している。歯科については敷地内の協力歯科医の往診が月2回あり、歯科衛生士による全利用者の口腔ケアも行われている。職員として2名の看護師がおり利用者の健康管理や主治医との連携を取り、24時間の対応が可能となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常の関わりの中での変化があった時はすぐに相談し対応してもらえる。24時間連絡が出来るので、職員も安心して利用者のケアができる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	コロナのため制限があるため、電話での情報収集している。分からない事、相談は再度電話連絡にて教えてもらっている。退院時のカンファをなるべく設定して頂き参加している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化してきた方については、今後の希望をご家族と話し合いご家族の意見を尊重し、主治医と連携を取りながら支援している。	重度化についての指針があり利用契約時に意向を確認している。状況に変化が見られた時には主治医から家族に説明を行い家族の意向を尊重しながら支援に取り組んでいる。今までにホームとして5名の方の看取りを行った。家族に見守られ最期を迎え、家族からは感謝の言葉をいただき、職員も感無量となり心を新たにしたいという。看取り後には職員間で話し合い、看取り中心になってしまうことへの課題について検討している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員は、緊急時対応マニュアルを周知している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練・消火訓練は年2回行っている。BCPプロジェクトを立ち上げマニュアルの制作などを行っている。	年2回防災訓練を実施している。火災を想定して1回は法人全体で、1回はホームとして取り組み、車椅子とシーツを使い、職員を利用者に見立て階段を使い1階まで避難する訓練が行われ、2階から3階への移動訓練も行われている。地域との防災協定が結ばれており複合施設の敷地内には防災倉庫があり、食料品等の備蓄もある。法人としてBCP(事業継続計画)プロジェクトを立ち上げマニュアル制作が行われている。新型コロナウイルス感染症についてのシミュレーションも行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	尊厳とプライバシーを大切にしている。コミュニケーションを取りながらその方に合った言葉かけや、対応をしている。	ホーム基本理念の一つとして「利用者様のプライドやプライバシーを守り、個人を尊重します」と掲げ実践している。また年1回、法人としての接遇研修があり意識を高めている。雑な声かけ、不穏にさせないことばがけ、声のトーン等に職員は心掛け、尊厳を大切にケアに取り組んでいる。基本的に声かけは苗字、名前に「さん」付けでお呼びしている。きつい言葉かけの時には管理者が指導している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者に合わせた声かけを行い、したい事をやって頂くように支援している。迷う時、分からなくなってしまうときは選択肢を提案している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	生活の中心は利用者様であることを心掛けている。介助の必要な方が増えているので、個々のペースに合わせる事が難しくなっているが努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	認知症機能低下のためご自分で服を選ぶことが出来なくなっているため、職員と一緒に選んだり、職員が選んでいる。食べこぼし等の汚れに注意している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	昼食の盛り付けは、順番でお願いして盛り付けて頂いている。イベント、行事の中で出来る事を手伝っていただき一緒に料理作りをしている。茶碗を洗う人、台を拭く人その人に合った事をお願いしてやってもらっている。	殆どの利用者が普通食を自力で、箸・スプーンを使い摂取することができ、刻みやとろみの方が若干名、介助の必要な方も若干名となっている。委託する給食会社が複合施設の厨房において料理を作り、ホームでは昼食のみご飯を炊き、じいじのいえユニットのみ味噌汁を作り、大皿で来たものを盛り付けしている。利用者の力量に合わせ準備、盛り付け、片付けの手伝いをさせていただき、春に染めた絞りの手ぬぐいを被り、おやつ・食事作りなどもさせていただいている。利用者の希望を取り入れた「秋の味覚・カレー作り」の企画では利用者が具材を切り、調理することで季節の特製カレーを存分味わったという。また、回転ずしからテイクアウトし寿司パーティーを行い「美味しいね」「うれしいね」と利用者に大好評であったという。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分・食事摂取量が少ない時は、記録に残しご本人の好みの物を提供して、必要量の確保できるように努める。必要に応じて管理栄養士、栄養士と相談している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自分で出来る方も磨き残しがあり見守りながら支援している。協力歯科医師が月2回口腔内を診て指導してくれる。また衛生士さんに歯磨きの磨き方のチェックをしていただいている。		

こころのひろばグループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄チェック表を用意し、尿意の無い方は定時誘導をしている。ご自分でトイレに行かれる方は、自尊心に配慮しながら排泄の確認をさせていただいている。	自立の方が三分の一おり、その他は一部介助となっている。布パンツ使用の方が三分の一でパットなしの方もおり、その他はリハビリパンツ使用という状況である。職員は排泄表を用いて利用者のパターンに合わせて確認し誘導を行っており、自立に向けた支援が行われている。トイレ内の照明はセンサーで対応しており、消えたかどうか心配する利用者もいるという。トイレドアにはイラストが描かれており利用者にもわかり易くなっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄パターンを把握し、排便が無い時は、看護に報告して指示をもらう。又水分を摂るようにお茶ゼリーを活用している。体を動かすように体操も取り入れている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴時間は、職員の都合に合わせて行っている。入浴中は1対1でゆっくり入ってもらい楽しく会話をし個別ケアに繋げている。個浴が無理の方は他事業所のリフト浴を借りて、負担をかけずに入浴してもらっている。菖蒲湯や柚子湯も行っている。	全利用者が何らかの介助が必要となっており、職員二人で介助する方が若干名いる。安全確保と湯ぶねに浸かってほしいという職員の思いから併設特別養護老人ホームの機械浴を利用することもある。入浴を拒む方は少なく声がけでスムーズに入浴している。5月には菖蒲、12月にはゆずを湯ぶねに浮かべ、伝統行事に親しみながらリラックスし、会話も楽しみながら入浴できるようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は、個々に合わせて休息を取れるようにしているが、リビングで過ごされている。日中活動することで、夜は休めているが心配事がある時は、傾聴して眠れるまでそばに付き添うようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	その方の既往歴を把握し、薬の必要性を理解している。飲み忘れや間違いがないように、ダブルチェック行っている。薬局で居宅療養管理指導をしている。相談等も気軽に出来ている		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物を干したり、畳んだり、茶碗を洗ったり、台を拭いたり、床掃除など、個々に出来る事をお願いして達成感を持ってもらえるように支援している。個人の趣味を大切に忘れぬように支援している。季節に合わせたイベントを計画している。		

こころのひろばグループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナのため制限があるため、外に出ることは、受診とたまにドライブを行っている。	外出時、杖・車椅子使用の方が若干名おり、その他の方は自立で歩行できる。新型コロナ前は高島城公園に散歩に出かけたりスーパーやコンビニに買い物に行き地域の方ともことばを交わしていたが、現在は、複合施設敷地内の散歩を兼ねバラを観ることなども自粛している。コロナ感染警戒レベルが落ち着いた昨年11月には久々に諏訪湖一周・紅葉ドライブに出かけることができたという。2階テラスでいちご狩りを工夫して行い利用者に喜ばれたといい、テラスは季節を感じ外気浴もできる絶好の場所となっている。毎日、すわっこ体操・童謡体操・廊下の歩行訓練で体を動かし機能低下を防いでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	認知機能低下により、ご自身での支払いが困難になっているので、金銭の所持の支援はしていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族に電話をかけて欲しいと言われた時と職員がご家族に用事があり電話を掛ける時に、お話をしてもらっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を取り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者様と一緒に季節の飾りを作ったり、その時の季節のイベント行事を行い季節感を感じてもらっている。音、話し方には注意している。	食堂兼リビングにはテーブルが置かれ、テレビの前にはソファも置かれ、利用者同士くつろいでいる。リビングの壁には季節の正月飾りや折り紙作品、書初め、利用者の写真などが飾られ、そのリビングで利用者が洗濯物を畳んだり、おしゃべりをしたりと、1日の大半を過ごしている。リビングからテラスに出ることができ、洗濯物を干したり景色を眺めたりと外出自粛の現在、気分転換のできる最高の場所となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファ・テーブル席の配置に配慮し、仲の良い方同士でくつろいでいる。1人になりたい時は、一人の時間を作っている。日向ぼっこを希望する人には、椅子を用意しゆったりと過ごすようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には馴染みの物や、ご家族様が持って来てくれた、写真、プレゼントなどを置いている。グループホームで制作した塗り絵、俳句など飾ってある。	備え付けのベットとダンスがあり、ダンスの上には時計や写真スタンドが置かれ、持ち込まれたハンガーラックに洋服が掛けられている。壁にはボードがあり、ぬり絵、カレンダー、書初めや手芸作品などが貼られている。窓からは日が入り、整理整頓された心地良い居室で、安心して思い思いの生活をされていることが窺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	フロア内では、個々に好きな様に過ごされている。物の配置や置き場所に配慮しつつ自由に動ける。危険なものは、その都度片づけをしている。		